

医事・文談 九百五十一 平岸 三八

《正岡子規(36)の続き》その239

子規と漱石(四十八たび続)
喉頭結核は肺結核の続発症として起るものが多いであろう。種々の症状のうち、嚥下痛が特長である。

節も唾液を嚥むたびに、咽喉に痛みを感じ、耳鼻科を受診して、その結核であることを知らされたのである。

当時はまだ肺結核の進展について、学問的研究が不充分であった。ランケ(Karl Ernst Raake)が、肺結核の病理学的研究に基づいて、初期症候群から記載したのは、節の死の翌年の一九一六年(大正5年)であつて、節が療養していた明治末期から大正初頭にかけては、はつきりしたことが分からなかったのである。

レントゲン(Wilhelm Konrad Röntgen)がヴェルツブルグ大学で「新しい未知の光線」を発表したのは一八九五年十一月五日のこと、我が国では明治28年のことである。未知の光線で、正体不明ということからX線と名付けられた。この発見に対し、最初のノーベル物理学賞が授けられた。

X線の発見は、これに次ぐラジウムの発見と共に、19世紀末の二大発見と称せられ、その後の原子物理学の発展に重大な寄与をなしたばかりか、結晶構造の研究への応用、工学・医学方面における実用的応用にも偉力を發揮している。今日の医学は、この両者の存在を抜きにしては考えられない。

レントゲン器械の改良と、撮影法の進歩は、田野の微細な陰影をも見逃すことなく、初期変化群から末期の病像までの進展について、いくつもの分類が発表されている。

しかし、大正初期には肺結核のレントゲン学的研究は、まだまだ不充分であつて、節の喉頭結核の原発症としての肺結核についても考慮を払われることが少なかった。それでなければ、節もあれ

ほど長途の旅をしたり、登山までの無理を重ねて、病気を悪化させること、惹いては生命を縮めるようなことをしなかつたのではあるまいか。

大正2年(一九一三)

久保教授とのかねての約束であつたのである。翌大正2年3月20日、再び福岡を訪れ、同教授の診察を受けたところが、同教授の言は「結核の疑さえない、喀痰の検査にも病菌を見出さない」というものであつた。

それまで何回か、会厭軟骨を手術で切除し、電気焼灼を施したのが効を奏したのか、喉頭結核が全治したということである。

それではもうこれで九州に来ることもあるまいと、持ち前の旅行好きを發揮して、九州では太宰府、宇佐八幡などを見物し、京都、奈良でも古美術を鑑賞し、更に出雲大社に詣るなどの旅行を重ねて、4月下旬、茨城の自宅に帰つた。

仮に喉頭結核は治癒したにしても、胸部に病変があることは明らかで、特効薬のない以上、進展したら如何ともすべからずであることは、当時と雖も医家なら承知していた筈である。ところが節に軽い運動をすすめたり、旅行や登山などまで許しているのである。

帰郷してからは、病気の父に代わつて農事的一切を取り仕切つていたが、次第に体調の不良を訴えるようになった。

全集や書簡、日記によると、発熱、倦怠が続き、咽喉の痛みも出てきたよう、肺結核の進展があり、喉頭結核も再発(?)をうかがわせるのである。そこで上京して内科の診察を受けているが、大したことはないと言われている。当時の医学は、診断にも予後にも、甚だ頼りないものであつた。

この年12月には、神尾医師の診察を受け、披裂軟骨に米粒の半分位の潰瘍があり、手術をすすめられ、同医師の金沢病院に入院し、12月27日第一回、12月30日第二回の手術を受け、入院のまま年を越すのである。嚥下痛があつたのであろう。

僅か10ヵ月前に、異常はない、結核の痕跡もないと太鼓判を押されたのに、もうこの始末である。節の悲嘆・落胆は大きかつたであらう。